慈光

第二十八巻　第八号

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和五十一年八月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通三二六号）

目次

63.8.21

近角常音先生講話……大字三右ヱ門記……(1)
一佛乘のこころ……白井成允……(4)
慈光のあと……福島政雄……(9)
佛かねてしろしめして……榊原徳草……(12)
念佛詩抄……木村無相……(17)
摂取不捨の真言(一)……花田正夫……(20)

近角常音先生講話

大字三右ヱ門記

段々と年寄って〈七十歳〉まいりまして、こうしてお話申すにつけ、大きな声が出せぬのであります。東京でも皆さんに前の席に出てお聞き頂いている有様であります。人間は生れて来た以上何れは死なねばならぬのは致し方ないことです〈翌年一月発病八月御逝去〉。私も、これはよく聞いて頂く通り、兄貴のお蔭で佛様を知らせて頂いた。世間にも佛法の真実のかたじけなさをよく聞いて居られまするが、その中において私如き者がお慈悲にあいまいらせたということ、どうしたことかと思うのであります。

私にしてみますれば、私の兄貴が生れて来てくれていたばかりに、ひとごとでない、私自身に光を与えられました。かく思いますと御恩の程がかぎりありませぬ。

人間界にはまことがない、全く何処の隅にいたっても真実は無いので、暗がりであります。この暗がりの中にたった一つの明りというものは、これは人間界に善知識なる方が現われて来て下されたということである、これ一つだけである。我々に念仏を与え広大なお慈悲を与えて下されたのであります。私も六十年来、書物を読みもしましたなれど、何もないのであります。我々の罪業の深いのを何処までも捨てぬとの仰せ、大悲深広だけが有難いのであります

私は東京でも歎異鈔のお話をしておりますが、ここでもまた第二章になりますが、

「各々十余ケ国の境をこえて身命をかえりみずして、尋ねきたらしめたまう御こころざし、ひとえに往生極楽の道をといきかんがためなり。然るに念仏よりほかに往生の道をも存知し、また法文等をも知りたるらんとこころにくくおぼしめしておわしましてはんべらんは大きなるあやまりなし。もし然らば、南都北嶺にもゆゆしき学生たち多くおわせられてさうろうなれば、かの人々にもあいたてまつりて往生の要よくよく聞かるべきなり」

聖人はどういうことでそうなされたものか、御流罪後、関東において御苦労なされた。常陸というがはっきりと何処か解らない。又聖人は六十余歳にして奥方を越後へ送り出し、お子様方もそれぞれ方々へ分散され、御自分一人だけで京都へ帰って来られた。ものの本にもその後何処でどうして暮しておいでになったものか明らかでないが、京都に帰られたことは明らかだったと思われます。

御伝鈔にもある通り、聖人は京都へ帰られてから「年々歳々、夢の如く、幻の如く」とあるように、一代の間とおって来られた道がどういうことであったのか、「跡をとどむるにものうし云々」とあります通りであります。

私共なれば、東京でお話して居って、又国許へ帰って信仰の話をよくやろうなどとおもわく気が起りますのですが聖人は、跡をとどむるにものうしと仰言る通りに、広大な御真実ばかりを頂いて、足跡をとどめて置くのがものういとして、かく諸処へ移り住むという具合になされていた。

聖人は御帰洛後、人々にもわからぬようにして、ただ南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏とやってござったのである。そこへ関東の人々が訪ねて来られたのである。第二章にあるように、それらの人々が「何か往生の道を存知し、また法文等をも知りたるらん」と、何ぞ変ったことを承りたいと思うて来られたのに対して、その時聖人は何と仰せられたのであるか。訪ねて来た人々も、こと往生の大問題であるよい加減の気持ではるばる関東からたずねて来たわけでない、真剣な往生の問題である。

「しかるに念仏よりほかに往生の道をも存知し、また法文等をも知りたるらんと心にくくおぼしめしておわしましてはんべらんはおおきなるあやまりなり」

聖人は御自分が関東に滞在中、皆に南無阿彌陀仏のお六字のいわれをよくよく話しておいたが、こうして皆で遠路たずねてくるところを見ると、随分話してあった積りなれどまだ信仰上皆がすっきりして居らぬ。それにつけ聴聞する場合にはよくかどを立てて聞かねばならぬと思うのであります。私の場合は、兄貴の愚痴話をきかされて、奇妙なことをいう兄貴とそれを問題にしたのであります。

関東より来た人々は、随分と聞いていながらお慈悲以外に何ぞ聖人が御存じであろうと思う位に考えているので、まだ信仰上すっきりとしていないのである。

「往生極楽の道を問いきかんがためなり。然るに念仏より外に往生の道をも存知し、また法文等をも知りたるらんと心にくくおぼしめしておわしましてはんべらんはおおきなるあやまりなり」

私なども、うかつとして取り違いをするのであります。すじみちを聞き、すばらしいことのあるなどと思いやすいのであります。法文等をも知りたるらんと関東より来たのなれば、それはそうでない。信心とは別段変ったことではない。道でありがたい人に出会って、本当にありがたかったと思わせてもらうだけのものである。

そういう具合に、念仏よりほかに何ぞ知っているだろうと思うなれば、私は念仏以外に何も知らぬゆえ、それなれば、他の人々を尋ねて聞きなさい。日本中に大学や博士方が沢山ある。法文いじりなどすると結局は討論会になる。それを望むなれば由々しき学者達も多くある故、そちらの方へ行って聞きなさい、と仰言ってから

「親鸞におきてはただ念仏して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」

われわれを助けたいと思しめすばかりに如来様は選択の願心をもってお念仏を御廻向下さったのであります。それだから念仏を空で称えるのではない。誰でもが称え易い、時と処とを選ばず、腹を立てて喧嘩していようとも、汚れていようとも、否汚れていればいる程お見捨てない御真実なのである。信心々々といえば何ぞ型紙でも頂くように思うかなれども、物をくだされて、貰ってただありがとうございますと云うのと変りないのであります。

「総じてもて存知せざるなり」

これなど皆さん始終お聴聞して居らるる御文でしょう。念仏を称えて往生をするなど考えているのは駄目であります。心得ての念仏ではあかぬのであります。お呆れない御真実を頂いての念仏でないといかぬのであります。

「たとえ法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候」

おそらく世界中にこんな言葉を言う人はないでありましょう。われわれ信心の話を聞いても中々解らぬのであるが、聞いてこちらが間違う、間違わぬということが問題ではないのであります。それは何故かというと、たとえだまされようと、ただありがたいお念仏と一たとえ地獄へおちようともであります。極楽を大丈夫ということでない。地獄へ堕ちても後悔せぬ、そうでなければならぬのであります。

「自余の行」他の仏様を拝み、念仏を沢山称える、それで地獄へ堕ちたとあっては後悔せねばならぬ。われわれは、どうあろうとも、どの道であろうとも、何としても心の持って行き場のない者をたすけんとの仰せである。広大の御真実なのであります。

私など、何処が有難いのかと申しますと、どれだけ悪しくともその者を捨てぬとの金むくのおまことをもって、われわれをおたすけ下される、こんな教は世界中にないのであります。よく聞いておいて頂きたいと思うのであります

（昭和二十七年九月二十九日、御自坊の報恩講）

一佛乘のこころ

白井成允

地下水のごとく

私は京都には余り御縁がなくて昭和二十八年に広島を退きましたとき、初めて京都へまいり住まわせて頂いておりますが、それは私の心の奥に、京の街から比叡山を眺めますと、私の故郷の山の姿によく似ているのです。故郷の山を忘れ難く懐しい心に引きずられて京都に参りましたが、朝夕拝んでおりますと、このお山を伝教大師がお開きになってから平安時代、鎌倉時代、我々の祖先が精神を本当に養って下さった、そういう方々がこのお山の上で修行なさったんだということが始終思われるのです。

伝教大師は凡そ千百年程前にこのお山をお開きになりました。明日お参りする横川の源信僧都が、それから二百年程後れて横川の奥の院においでなった。更に二百年程後に親鸞聖人が二十年ばかりおいでになった。私には最も懐しく尊く仰がれる方々なのです。それが皆、源を聖徳太子から発しておいでになる。その流れが日本民族の宗教的、道徳的、魂の流れの根本をなしているのであります。

今日は仏教が忘れられてしまっているような時代の姿でありますが、然し聖徳太子以来千三百年、伝教大師以来千百年、その永い間、こういう尊い方々によって、私共の祖先の心に浸み込まされた教が、あだかも地下水のように、地面の下にかげをひそめて、じめじめと流れているような姿で、今日の日本民族の魂の奥底に浸みこんでいるのだと思うのであります。その地下水として流れている流れに私共は養われている。それがあればこそ、国土全体が焼かれてしまったような、外国に占領された敗戦という惨めな国の有様から、二十年の短い間に、外側だけでも今日のように立上り得たと思います。それは忘れてしまっているようでありますが、本当は皆が、そのおかげを蒙ってこういう力が湧き出しているのだと、そう思うのであります。

得難くして移り易し

さて、今日の尊い集りに参加させて頂いてこの会場に参りますと、「照千一隅」という伝教大師のお言葉が掲げられている。これは先き程岩本先生がお話下さった通りであ

ります。更に床の間に「難得易移其人身、難発易忘斯善心」（得難くして移り易きはそれ人身なり、発し難くして忘れ易きはこれ善心なり）というお言葉が掲げられてあります。これも大師のお言葉と思われます。何時も頂戴いたします三帰依文の初めに「人身受け難し今已に受く」とありますね。私共人間として生れさせて頂いており、これを何でもないように思いますが、人間のいのちは受け難いいのちである。そして得難くして移りやすいのは人の身である、必ず死ぬべき身である。このことをよく考えなければいけない。私共一人一人の身の上であるということが根本として考えられなければならないと思います。

源信僧都の『横川法語』の中に「人間に生れたることをよろこぶべし」とありますが、この一言の中に、僧都には無量のお心があられたのでありましょう。人間に生れたから仏法をお聞きするようになった。人間に生れたから伝教大師、源信僧都、親鸞聖人、ああいう尊い方々の教を私共も耳にすることが出来るようになった。

さて、その仏法は、ここに根本中堂即ち一乗止観院を伝教大師がお建てになったのでありますが、一乗の止と観を修める場所である。止は心を静め禅定に入る。観は心が静まったところに、本当の尊い真理を観ずることができるということばだそうですが、そういう止とか観とかの修行をしたことがありませんから、本当のことはわかりませんが「一乗」ということの意味だけは、私ども、おぼえておかないといけないと思うのです。これは太子が、日本民族に初めて仏教を教えて下さったのですが、その仏教の中で一番尊い仏様のお心を本当に表わしておいでになる一乗仏教を日本民族の教として遺してくださった。

一仏乗の教

一乗というのは、一つの乗りものとかいてありますが、一乗に対して二乗三乗五乗とか、種々の乗りものが言われてあります。のりものと云うのは、私共は朝夕迷い乱れてあさましい世間を造っておりますが、そんな迷いの境から清いさとりの境に行くための乗りものを云うのです。その悟りの境にも深い浅い、高い低い種々の段階がありますので、それに応じて二乗とか三乗とか種々の乗りもの、即ち教があります。教がそのように分れているのは私どもの性質に賢愚、善悪といろいろ分れているからです。

私共の性質に応ずる方面から区分すると二乗、三乗、五乗とかに分けられるが、根本の仏様の心に立ってみると、すべての衆生みな同一である。同じいのである。『大般涅槃経』を読ませて頂くと、そういう仏のお心を「一子地」といっておられます。親鸞聖人が和讃でこの一子地という言葉を用いて、それは三界の衆生をわが一人子と思う心で

あるとふりがなをつけておいでになる。迷い苦しむあらゆる衆生を、わが一人子と思うのが仏様の一子地の心であるその仏様の智慧が教となってあらわれてくるところに一乗という教がある。二乗とか三乗とかに分れているのは、本当は皆一乗に導き入れんがために必要な方便の教なので、結局あらゆる衆生を皆この自分と同じ仏の悟りに入れしめずにはやまないという心、これが仏様のさとりというものです。だから仏様のさとりそのままに現われてくると、あらゆる衆生をわが一人子としていつくしみはぐくむということになりますね。

日本仏教は、聖徳太子様が一乗教ということを教えて下さったのは、下から修行を積んで上っていくということの奥に、仏様の境界から私共衆生の方に下ってこられて、私共を仏様の境界に摂めこんでしまうという教が根本になって流れているのです。仏様の絶対の境界から私共の境界を御覧になるというと、いろいろ自分自分と違った考え、風俗習慣等、小さい自我にしがみついて、あくせくと迷い苦しんでいる。そういうことが現実の姿でありましょう。それを自分の方から出発して、この迷い乱れを脱れようとしますと、たとえば善を行うということでも、今日の問題で云えば、ベトナムの戦い　アメリカの大統領は、戦争をもって共産主義の人々を降伏させてしまうことが、人類のため善であるという立場に立っている。共産主張の人々は共産主義によって世界を制伏してしまうところに、人類に本当に幸福な社会が成り立つんだと、だから、中国やソ連の民族からは共産主義によって、外の国々を制伏してしまうというところに善を認めます。アメリカのような立場では共産主義を敵として、それを制伏してしまわねば本当の世界平和は来ないということになる。これは自分の立場を是とし、相手の立場を非として、我は善し、汝は悪しという立場にあって歩んで行けば、人間の世界に争いが止む時がないということが、ベトナム戦争一つを見ても解ることです。

宿業の衝突

先き程拝読いたしました、太子様の憲法第十条のお言葉「こころのいかりを絶ち、おもてのいかりをすて、人の違うを怒らざれ。人皆心あり、心には各執れることあり。彼れ是（よし）みすれば即ち我れは非（あし）みし、我れ是みすれば即ち彼れは非みす」と。そういうことが今日の世界の現状でありましょう。これは個人と個人との交わりも同様で、民族と民族、国と国との対立もみんな我れ善しとすれば彼れ悪しとするというところから起ってきています

ところが本当に考えてみると「我れ必ず聖なるに非ず」われは必ず正しいのだと、彼れは必ず間違っているという

ものではない。資本主義の立場も歴史的必然から現われてき、共産主義の立場も又歴史的必然の立場から出てきたのです。そこには人間生活の必然として、あらゆる社会の状態、ある社会の状態から、そういうのが必然に現われて来なければいけない事情があるのです。これを仏教の言葉で業と云いますが、我々の宿業であります。アメリカにはアメリカの宿業があり、ソ連には又その宿業がある。その各の宿業にこばまれて、我が進むところはよしと、汝の進むところは悪いと、そうしているあいだ宿業と宿業の衝突が絶えるところはあり得ない。

それで一乗という立場は、この第十条の終りに「我れ独り得たりと雖も、衆に従いて同じうして挙（おこな）う」自分がよく物の道理がわかっていると思っても、自分一人の意見を通すということでなく衆に従って同じくおこなうというのは、例えば、看護婦さんが、病人を看護する時には、病人の心や体の状態をよく理解して、同じ心持になって、一心になっておこなうということです。自分の主義主張を棄ててしまって、戦時は忠君愛国を振り廻し、戦い敗れてしまうと民主主義を振り廻して、その時その時の時代に迎合するというようなことではないのです。皆の人の心のすがたをよく見て、観音様が、衆生の声を見抜いて、凡ゆる人の所へ行ってこれを救って下さるように、健康な人があり、いろいろの差別の人があるのですから、その如何なる人にも、その宿業によってそうなっていることをはっきり見抜いて、その人その人に同じて、その人が本当に生きて行くことが出来るようにしていくこと、それを衆に従うて同じく挙うというのです。

差別宿業を超えて

仏様が一切の衆生を一子のごとくにみそなわすということは、凡ゆる衆生の宿業をよく御承知になって、共産主義でなければ社会が立っていかないような国に対しては、共産主義を援けてよいでしょう、資本主義でなければならない国には資本主義を援けてよいでしょう。本当は資本主義も共産主義も人類の理想社会というものは　一乗に帰すると私は思うのです。

人類が全体として各々が安らぎ和らぐ、大いなる和らぎの国を組織することが出来るためには、この各の差別宿業の地盤に固く立って、他を無視し排斥して争っているのでなくして、根本の一子地の境界、仏様の境界から下り来って、すべてのものを生かして下さる、その教が本当に知れて来なければいけないと思うのです。伝教大師がここに一乗止観院と仰せられた一乗の教は聖徳太子の教から流れてきたものです。この一乗止観の修行が展開していって、日本民族を本当に生かしてきた教はみなこの一乗止観院の源

から流が出た教だということが思われるのです。

一仏乗の伝統

ところが国家的には今、民主々義だ主権在民だと云っていますが、それは西洋思想から来た言葉で、それに喜び躍っているのは、祖先から伝えられた一乗の貴い教を忘れて迷っている姿です。一仏乗において天皇様も私共も皆等しく如来の一人子です。聖武天皇がビルシャナ仏の御前に礼拝されて三宝の奴（やっこ）と仰せられたのはこれをお示し下されたのです。決して本居宣長が歎いたように単なるインドの神を拝まれたのではなく日本国が宇宙的真実の地盤の上に立った大和の理想を照らされて栄ゆる国であることを畏くも御身を以て顕わされたのです。仏様があらゆる衆生を一子の如くいつくしみたまう。そのお心をもって天皇様は国民のすべてをわが子として育くみたもう。ですから一仏乗の伝統に立つ時、天皇の大御心はいつも主権在民であられたのです。民衆の福祉を念願せられるところに本来、御身を民衆のために捨てるご精神がひそかに伝わっておられたので、それが外国からの侵略に遭った時に、いつも顕われてきたのです。天皇様は民衆を思い、そのみ心が民衆にしみとおって民衆は天皇様を思う。その民衆のすなおな気持からは主権在君が自然です。私は今の憲法に謂う所の主権在民とは本は天皇様のお心から言わせられた事として有難く承ります。近代西洋諸国の歴史に見られるように、民衆が血を流して国王から奪い取ったものではありません。二元的対立抗争は一仏乗の世界にはありません。私共の祖先を一仏乗の流れを以て潤して下さったこの比叡山に詣でてこれを思うこと切であります。

（この文は比叡山での現地講座における講話です）

盆の歌

巌谷小波

ぼんは嬉しや別れた人も　晴れて此世へ会いに来る
昔話につい夜もふけて　月もかたぶく西の空
踊る手ぶりに見とれて月を憎や雲めが邪魔をする
どんと叩いた太鼓の音に　あの世この世の戸が開く
輪廻はなれて気も軽々と　まわる踊りの輪の圓さ

慈光のあと

福島政雄

四

此の時を境目として私は仏陀の大心光に徹せしめられてこの世の旅行く身となった。

ふりかえってみれば教育の野において、寂寥孤行の自己の姿を発見した私こそは正しく善導大師の二河の河畔に立った身であった。荒涼たる河畔に私は唯一人立って居た。私の魂は絶対絶命であった。南に燃ゆる火の河は、私の魂から出でて燃ゆるものであった。北に湧き立つ水の河も、私の魂から出て湧きかえるものであった。それは私が教育界を憤慨する瞋恚の炎であり、それは私が教え子に利己中心の要求をする貪愛の波であった。しかも自ら自己一人を孤行の世界に置き。友をはなれ父母にそむいて、しかも自ら自己の淋しみに泣いて居たものである。四顧、寂莫頼るべき人もなく、心を打ちあける友もなかった。

此の時、私の魂の底にひびいて来た御声こそは、近角師をとおしてひびいた釈尊の発遣の御声であり、彌陀仏の久遠の招喚の御声であった。それは沈み行く私の魂の底にしみとおって、私が如何に暗黒なる自己の姿に哭いていようとも、否その暗黒が深ければ深いほど、その苦しみが痛切であれば痛切であるほど、層一層、我れを悲愍したまうてわが魂の底にしみ通り来って、われに生命を廻向し、われをして久遠の道によみがえらしめたまうところの至心廻向の仏の大心光であったのである。

その大心光がほのぼのと私の魂の奥を照し、私の魂はそこによみがえった。殊にそれから以後、私は阿闍世であるという自覚が起って来た。私が父母に対して刃向う心が鮮かになったときは、やがて私がはじめて阿闍世入信文に接した時であった。その因縁は誠に微妙であった。

元来私は所謂順境の児であった。私の修学時代はことに順境であった。中学の五年に至るまで祖父母と父母の慈愛を受けた。その後間もなく祖父母は世を去ったけれども、大学卒業に至るまで父母共に存し、兄弟も無事で、私は家庭の児として実に幸福な日々を送ったのであった。もとより経済的には豊かではなかった。中学の一教師として四十

余年をはたらき通した父には、次第に多くなる家庭の扶養ということは重い負担であった。私の母には生涯金銭の余裕はなかった。しかも私の父の家庭は幸福であった。精神的に幸福であった。私はさながら思籠の波に揺られて修学時代を過したのであった。

然るに私の青春のあらしは、その思籠の感を一朝にして吹き去ってしまった。私は父母に対して何とはなしに和らがぬ感じを持つようになった、誠に青年期は私にとっては背恩の第一歩の時期であった。恋心はくせものであった。それは美しそうに見えて実は私をして忘恩の児たらしめる第一の動機となった。相対的な五分五分の心は父母に対しても動いた。私は利己中心の感情から、父母が私を理解してくれぬことを淋しがった、否父母は青春の私を理解してはくれないものと一人ぎめにきめて、私の勝手な淋しみにひたって居たのであった。

この時私は正しく阿闍世の歩んだ道を歩んで居たのであった。私自身が一の阿闍世となってしまったのであった。「阿闍世とは普く一切の五逆を造る者に及ぶなり、又、為とは一切有為の衆生なり」との涅槃経のお言葉は私を指させられたのであった。私こそは父母を忘るるばかりでなく父母の胸に三毒の矢を射かけて　父母の身から血を出しておりながら自らこれを知らず、煩悩の暗より暗へ迷い入って居たのである。

然るにその私に「阿闍世王のために涅槃に入らず」の久遠の御光は照徹したまうた。「阿闍世とは即ちこれ煩悩等の具足せるものなり」その煩悩の暗の深さに徹せずは止まずとのやるせなき本願を廻向したまう久遠の仏光、まことにその光の前にこそ私は煩悩態の自己のすがたをまざまざと見せしめられるようになったのであった。

青春の嵐の吹き来り吹き去ったあと、おもえばただあいがたき仏縁にあいまいらせた歓喜の涙のせまり来るのを覚えるばかりである。

五

心の嵐はそのままに止んだのではなかった。その七月のしみじみとした法悦の一週間、それからなお続いた四十余日のなごやかな心持、それが終る頃から私の心は次第に内面の世界にむかうようになった。

今までは外に向って戦う心ばかりが動いた。それからは戦が内面の戦となった。ひとしきりなごんだ心持が過ぎ去ると共に、秋風と共に秋の月の光と共に、私の心にしみこんで来たことは、罪と煩悩との問題であった。青春のまぼろしはまた次々に私の前にうかんだ。それにつれてなお父母に背こうとする自己の姿がはっきりと見えた。暗い波が次から次へと押寄せて来た。それがいつも光の前に融かさ

れて行った。暗い波の力が次第に大きくなった。私の心は光と暗い波との間に動揺した。苦しみ苦しんではほっとわれにかえるとき、私はいつも大悲の光の中に立って居た。

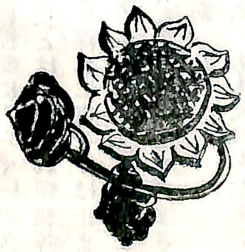
併し煩悩はどこまでも私について来た。結婚問題というものもまだそのままになって居た。それについて苦しむことが多かった。ただ併し今は私の心持を父母に打明けないという態度ではなくなった。苦しみがあるにつけても、煩悩が狂うにつけても、それらを皆父母に打明けるという態度になった。そして父母の心をいためることがなおさらに多くなった。

その内心の煩悩の波瀾の秋に私は大病にかかった。急性盲腸炎のために腹部切開の手術を受けた。二週間は病院の床の上に仰臥したままであった。四週間入院して居なければならなかった。この病床で少し気分がよくなった頃から私は様々の御聖教類を次から次へと読んで行った。むつかしい言葉は大低わからなかった。併し何となくしみじみと魂の中にしみこんで来るものを感じた。

清沢師のものなども読んだ。それは全集第二巻の「信仰及修養」という巻であった。清沢師の強い信念がまた私の心にひびいた。そして身と心と次第に快くなって退院する頃にはすっきりとした心持になって居た。私は故郷の父母へ手紙をしたためた。今までにどれほど親の心に矢を射かけたかということをわびる心になった。そしてくだかれて行く心の平和を味った。青春の嵐の吹きすさんだ間、様々の人々が仏のように見えたり、鬼のように見えたりした。それはみな私の心のすがたに過ぎなかった。「世間虚仮、唯仏是真」私は私の心を中心とする人の世がすべて「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界」であり、「よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきにただ念仏のみぞまことにておわします」の味がそこにあると知った。そしてこの歎異抄のお言葉の意味をしみじみと我が身の上に味わうようになった。

その年の暮、私の二十六歳をおくる除夜の鐘が中野の里にひびいた。親しい友とつどうた私の心にはしめやかなよろこびが湧き出た

（信界建現第八号より転載）



佛かねてしろしめして（承前）

榊原徳草

五

お釈迦様がお弟子の猿に「木の苗を植えたから根をつけさせねばならぬし、だからお前、毎日水をよくやって枯れないようにしなさい」と云いつけた。「はい」というとお猿が毎日苗に水をやった。そのうちに、一本一本木を抜いては「ついたかな〳〵」と思って、しらべて「ああついている、ついている」とやっている間にすっかり枯らしてしまったんです。これは、我々のはからいの駄目なことをお釈迦様がお譬えになったことです。我々はしよつちゆう、ついたか〳〵をしてやしませんかな。そうではなしに、水をやっていたらついてくるんです。根っこがつく世界と水をやる世界と、全然別であるけれども、実は一つの世界があるわけです。意識の世界だと、ついたかな、根っこはどうだなと、こういうところで抜いてみなければならない。そうではない世界がある訳ですね。お念仏の世界も私の中に流れている一つの世界を見出す、――それがお念仏の本当の究極の目的であります。

ご開山は「非僧非俗」といわれ、そして「愚禿親鸞」と仰言る。僧に非ず、俗に非ずというのは、―僧と俗とは相対的なはからいの世界である。俗人であったのが、頭を剃って衣を着てお経を覚えて僧になるのです。しかしいつも剃っていないとまた生えてくる、だからしよつちゆう剃らなきやならない。だから僧と俗とは―僧の可能性をもっておる俗人であり、そしてそれを可能にしたのが僧であるとこういう相対的の関係の中にある、これが僧俗であります

ですから聖人はそういうはからいの世界といいますか、二つの世界を―そうではないんだ、と、僧に非ず。そんなら俗か、俗にあらず―。この世界で、私は何遍でも行ったり来たりしておつて、これは駄目だったんだと。それで愚、本当に愚かである。こうしたら、ああしたらという、そういう知恵―、その知恵は真実の知恵でないんだ、と。

禿と云う字は「はげる」という字。これまた、僧俗に関係する言葉です、頭を剃るということは、毛が生えるから剃るわけです。ですから俗人が僧になれるんです。禿とい

うのは、もとから毛根がない、禿げてしまつている人のことですね。もう生える可能性のない、つるつるになっているのが禿なんですね。ですから、もう剃るようなものは出てこない私、全然駄目な私なんです。ああしたら清浄の心になれようかな、こうしたら仏様になれるかなというような、そういう気はすっかり何にもない駄目な奴なんです。愚かなんです、禿ちやらなんです。これが「非僧非俗」「愚禿」親鸞なんですね。

ここまで、聖人は自己を掘り下げ〳〵て、絶対に駄目な自己を照し出されていられたのが、これが—こういうお前をこそ十劫の昔から待っておつたんだ、そういう奴だからこそちやんと私はお前を救おう〳〵にかかつておつたんだ、わかつたかねという、こういう如来のお呼び声にふれられた訳であります。これが、法然上人から受けつがれ、上人をお師匠として「親鸞におきてはただ念仏して」……。

ここのところは「機法一体」と真宗の教では云われますが、禅宗の方でしたら明暗層々、と。明るいのと暗いのとが並び並びそのところにあると云います。

ですから、暗いのがとれてしまうて明るいのになつてしまったんじゃない。明るいのが見えると同時に暗いのが見えてくるわけです。機法一体でありますからして、機法合体じゃない。機はどこまでも機で、私は駄目な地獄行きであるまんま、そのまんま如来のお救いのお手が私にかかってくる。それが別々。如来様と私と全然別個です。別個であるけれども一体なんですね。夫婦が別の肉体をもつて存在しており、しかも夫婦はそのまんまで一体なんですね。なんぼ男と女と寄せてみても、夫婦でなかつたなら一体ではないわけです。これが機法一体でありますね。

六

地獄が本当にわかるのは、お浄土へ行ってからわかるということが「大無量寿経」に書いてある通りです。この上では、我々の世界では、本当にお浄土なんかわからない。本当にお浄土に行ってこそ、初めて真実の地獄がわかるんだとこういうことも仰言つていますね。九州のある偉いお坊さんは「地獄は言葉が通じない世界である」といつていますが、地獄とは、我々の言葉の通じない世界で、まあ言うてみたら、この頃の赤軍派が鉄棒を持ってひっぱたいて殺したり、ああいうことをする世界が地獄の世界です。言葉が通じない、もう問答無用で、やっつけるだけです。

そして「人間界は言葉の通じる世界」、しかしまたこの言葉が災いをもしますが、それと同時にまた、これをよすがとして、丁度煙草のキセルみたいなものです。煙草をのむには煙だけが必要なんだけれども、キセルにつめて吸うと、思うように煙が熱くなく口に入ってくるようなもの。

そういうように、言葉自体には本当の値打はないんですけれども、そのキセルを通して、いい本当のものが入ってくる。だから人間の世界の言葉の世界、はからいの世界を、はからいは駄目だという意味におけるはからいにおいて、本当のはからいが、如来のはからいに通ずる世界が出てくるわけである。

また「浄土の世界は言葉のいらない世界」だそうです。地獄の方は言葉の無い世界です。お浄土の方は言葉の要らん世界です。「心は浄土に住みあそぶ」とありますように、私共はここに居りますが、その味わいを正定聚不退転と申しますか、この土で信心に目ざめさせて頂きますと、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏というこの言葉一つで一切が通じることが出来る。一切が弁ずることが出来る。こういうところにあらゆる言葉の発生するもと、一から始まる世界—あらゆる言葉は二から始まりますが、一から始まる世界、根原的なもの、これが南無阿弥陀仏と思います。

近江聖人といわれた中江藤樹の言葉に「我々の後の方に本当のものがある、前の方には本当のものはおらない」とあります。五六年前のことですが、私が或る時〃如来さんは胸中におられる〃とふっと思ったことがありました。それを話しましたら、あの「念仏詩抄」を書いた木村無相君が「近江聖人の言葉にも艮背適応（こんぱいてきよう）と同じようなものがありますよ」とのことでした。

私が「如来さんは背中におられる」と思ったら、私よりずっと〳〵昔に近江聖人が言っておられました。艮背適応とは「易経」にあるそうです。歎異抄九章の「しかるに仏かねてしろしめして」これと同じこころです。

我々はいつも前の方、明日々々と先の方先の方に向いて生きておりますが、しかし、前の方ばかり見て生きているそのまんまで、如来さんは背中にびったり、一ミリも隙間なしに私にひっついていて下さる。背中と私とは全然別個じゃないし、一つなんですね。意識の世界では前の方ばかり、目も向こうむいている、耳も向こうになっておる。みんな向こうに向こうになっておるけれども、それにちやんと相即し、そのまんま背中がちやんとひっついている。艮背適応している。如来様は背中にいらっしゃるんですよ、皆さん。「しかるに仏かねてしろしめして」如来様は背中にいらっしゃるんです。

こういう様に、見えない世界、我々のはからいのすたった世界、しかも一切のはからいのもとになる世界—あらゆる宗教といいますか、根元的に人生を探究しているものはそこを仰言っているんですね。その世界が南無阿弥陀仏なのですね。如来のおはからいのある世界が南無阿弥陀仏なのです。そこで歎異抄の二章にお示しのように「親鸞にお

きてはただ念仏して彌陀にたすけられまいらすべしとよき人の仰せをこうむりて信ずる」、南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏と、こういただくばかりであります。

七

私も三十一才の秋に、どうやらそういうお念仏にあわせていただいた。四十四、五年前の話であります。それから本当に心の中に明りがつくようになりました。今迄真暗がりでおった人生に明りがついたものですから、さあこれからこれを皆さんに伝えねばならんと思って、あっちこっちと念仏のお話をして走り廻りました。こんなことを十数年続けておりますうちに、歎異抄の第九章がないと生きられなくなった。いつの間にやら喜びもお念仏もだんだんうとく、うすくなってくる。いわゆる風呂念仏、そんな状態になって、だんだんうとく、うすくなってしまう。お念仏しても有難くもなんともない、砂をかむようなお念仏、どこかへお念佛がすつこ抜けてしまったんじゃなかろうか、何もなくなってしまった……。こういう様な心がおきてきたのです。その時、第九章のお示しが心にしみるのです。

「念佛申し候えども踊躍歓喜の心おろそかに候うこと、またいそぎ浄土へまいりたき心の候わぬは、いかにと候うべきことにて候やらんと申しいれて候いしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじ心にてありけり。よくよく案じみれば天に踊り地に躍るほどに喜ぶべきことを喜ばぬにて、いよいよ往生は一定と思いたまうべきなり。喜ぶべき心をおさえて喜ばせざるは煩悩の所為なりしかるに仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりとしられて、いよいよ頼もしく覚ゆるなり」

本当にこの仰せ、念仏もものうくなってしまう。あくび混りの念仏しか出て来ない、ご信仰はどうなったのやらと、くるくる廻って探さねばならんような私に対しての聖人のお聞かせであります。池山先生はここを「檜舞台に呼びあげられて」という題でお話されました。ここの所で、唯円房の影にかくれておる、榊原さん、何々さん、何々さんとこう呼んでお話されました。「かくの如きの我等がためなんですよ」と聖人が仰言るんです、と。九章で、唯円房と聖人だけの問答だと思っていたら、知らぬ間に檜舞台に私も引き上げられて、聖人と同座させて頂く、これを知らされました。

「念仏申し候えども踊躍歓喜の心おろそかに候こと」これを我々は何とも思わずに他人事に読んでしまえばそれまでですが、命がけの事なんですね。もし聖人が「そんなことでは駄目」と仰言つたら百年目、救いの道は断たれるのですから。それを申出るのは生命がけですね。自分が本当

に人生の指針と仰き光と頂いている信仰がだんだん消えてくる、怪しくなってくる、これを打明けるのは真剣勝負なんであって、自分の生死の問題、後生の一大事の問題です。それを聞きとられた聖人が「親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじ心にありけり」と仰言る。大体我々は。あんたもそうか私もそうだがと「あんた」の方が先に来るんですね。わしは教えてやる方で、お前は教えられる方だという建前が、腹の底にあります。ところが聖人はそうでない。私というものが常に中心になっている。私を一番大事にして生涯を生き抜かれ、九十歳の天寿を完うされた聖人ですね。

親鸞聖人は、二河白道のお譬の中の「汝一心正念にして直に来れ、我能く汝を護らん」の中の「能く」という字を註釈せられて「能の言は不堪に対する也、疑心之人也」とあります。不堪とはそれは出来ません、そういうことに対する言葉が、能、出来るということ。またこれ「疑心の人なり」で、こんな奴では、こんなことでは、私はまだ本当にお慈悲にあずかれんのじゃないかなあ、駄目なんじゃないかと疑いがある、そういう心の人なり。能というは不堪に対するなり——これは説明でしょう。ところが、これを最後に摂めとるところは「疑心の人なり」と、ただ言葉の詮索だけでなしに、最後は生きている人間にもつてきていつでも解決しておられる、聖人という人間、即ち具体的には親鸞聖人—自分ということが常に中心になっておる。我々は常に頭だけで、ああそうか、ああそうかだけでやっています。

また「鈍」ということを聖人が仰言っている。鈍な男だなあという鈍、鋭利の鋭という字の反対の鈍。それを「心の鈍きことなり」でなしに。人なりと聖人は仰言つていますね。ここにも人なりです。このように聖人が常に、人なり人なり、私なり、と仰言っているところに驚かされるのであります。我々は、常に事柄を知っていても、本当にものを知らない。訳を知っておって、本当のものを知らない。譬えは雪を見た人は、これを白いと云う。我々は物事を見た世界だけしか知っていない。この雪に触れた人は、冷たいと云う。これで身に触れて始めて雪の雪たることを知るわけです。聖人は常に、いつでも、その世界、人の世界、生きて血の通ってる世界でものを仰言っておいでになる。

常に聖人は生きていられる、我々はいつも死んでいるということなんです。歎異抄の九章で、唯円のおたずねに対して「親鸞もこの不審ありつるに」と、御自分の方が先に出ていらつしやるところがここにある訳です。

（昭和五〇、八、二四日、文責編者）

念佛詩抄

木村無相

摂取信心

東海講師仰せに
〃摂取の先手より
お助け一定の後手が
あらわるる——
弥陀は先手
行者は二の手
このことわりを
忘るべからず——〃

摂取信心
摂取信心
お助けが先き
信は二の手
このわたくしが
お助けに
助けられるなり

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

どうしても

どうしても
お念仏申さねぼ
居れない時がある

ああ
お念仏を
たまわりしことの
ありがたさよ

かたじけなさよ
ナムアミダブツさまよ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

助けたまう

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

追いまわして

恵空講師仰せに
〃われらは
佛の方よりつき添わせられ
上根も下根もみなともに
追いまわして助けたまう〃

追いまわして
追いまわして
追いまわしたまうて
ナムアミダブツ
ナムアミダブツと
とらえたまうて

正定聚

お園の歌に
〃機をみれば
どこをとらえて
正定聚——
法にむかえば
うれしはずかし〃

正定聚とは
如来のお決（き）め
凡夫の決める
ことじやない

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

大悲のおかげ

明信寺師仰せに
〃ヒトに聞かせようと思つて
説く声が
わが耳に入りてかえって
お聞かせにあうことあり〃

説くも聴聞
聴くも聴聞
聞かせにやおかぬ
大悲のおかげ
説けるも
聴けるも
大悲のおかげ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

法を聞くばかり

明信老人曰く

〃この心は
飼（か）いぱなしで
法を聞くばかりじや〃
この心
わたしの心
相手になつても
しかたなし
この心
好きなように
させといて
法を聞くばかり
法を聞くばかり
法を聞くばかり

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

攝取不捨の真言 (一)

花田正夫

たとえ親子であっても、心が断絶しているのでは本当の親子とは云えない。仏陀が一切の衆生をみそなわして、一子のように愍念して下さっていても、そのおまことが徹到しない限り、他人仏でまことに悲しい限りである。

併し、親心子知らずで、私共に真実の心がなく、佛心のおまことを知る力もなく、闇の砂漠を右往左往してはてしなくさすらうのがその定めであるが、親心を知る力もない子にうまずたゆまず慈愛の手をさしのべる悲母のように、仏陀の大悲はあらゆる善巧方便をめぐらして下さるのである。親鸞聖人の常の仰せ「彌陀の五却思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思し召し立ちける本願のかたじけなさよ」とは、仏心のおまことを直接に御身に頂かれた聖人の、慚愧と感謝のお述懐である。

○

さて私共をここまで導いて下さるには一朝一夕の御苦労ではない、そこに仏陀の長時不断のおそだてがある。譬えると、深海の魚には眼がないと聞くが、この魚に絶えず光をそそぎ、長年月の刺戟によって感光部が出来、やがて発達して眼が出来るまでには気が遠くなる程の歳月が必要であろう。

「噫、弘誓の強縁は多生にも値い難く真実の浄信は億劫にも獲難し、たまたま行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」とは、聖人が、智目行足の無き、地獄一定の身と信知されると共に、心もことばもたえはてる仏の御苦労の程を随喜されたのである。そのおそだての光明を色光と云い、徹到した光明を心光と云われる。その趣きは、親が燈火を掲げて迷い子を山深く探し求め、やがて見つかると、その燈火に導かれて親の家に連れ帰らされるに等しい。

色光は、どうあろうともわが一人子を探し出さずばおかじとの働きが外に顕現し、心光とは、一度見出した子を親の家につれもどすまでは護り抜く仂きが内に徹到する。

さてこの心光照護の真味を、具体的に実際生活の上で、手を執って教えられるのが歎異抄の第九章である。

「念仏もうし候えども踊躍歓喜の心おろそかに候うこと又いそぎ浄土へ参りたき心の候わぬは如何にと候うべきことにて候うやらんと申しいれて候いしかば、親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじ心にてありけり。よくよく案じみれば天に踊り地に躍るほどに喜ぶべきことを喜ばぬにていよいよ往生は一定と思いたまうべきなり。喜ぶべき心をおさえてよろこばせざるは煩悩の所為なり。然るに仏かねて知ろしめして、煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりと知られていよいよ頼もしく覚ゆるなり」

が、その前半である。かねて聖人のおそだてをこうむって本願を聞き、大きな慶びの中にお念仏申される身になっていた唯円房が、その後年月をへるに及んで、信心の火が消えたのではないが、そとぼりが冷めて、喜びもいいかげんなものとなり、浄土はわが帰る故郷と知らされながら、この世のことにかかりはてて一向に心がそちらにむかなくなった。そこで種々に苦心して昔の心にかえそうとしたことであろうが、思うようにならない。そうなってみると我とわが信心が危ぶまれて、はるばると関東から京都の聖人をおたずねして、心中を打ち明けてお教えを乞うたのである。この時の唯円房は人生の大事を信心一つにかけている身とて、重病人が名医の診断を求めるに等しい心であろう「そんなことでは」と、もしも聖人が仰言つたらそれこそ百年目である、救いの綱は切れてしまうのである。

ところが、唯円房の言葉に即応して、打てば響くように「それは親鸞も合点のゆかなかったことであったが、唯円房同じ思いであるな…」と仰言る。こんなあさましい心は自分ばかりで、聖人もおあきれになるだろうと、内心おそるおそるおたずねしたのに、思いもかけず「唯圓も同じ思いであるな」と仰言り、語をついで「天に踊り地に躍ってもよろこぶべきことを喜ばないのでおたすけにあずかることに間違いないと思うがよい」と仰言る。

これは唯円房にしてみれば全く思いもかけぬお言葉である。私共は相対五分五分の心ばかりで、大恩をこうむりながら喜こべない。この様なあさましい者は捨てられるのが当然であるのに、こちらが悪くすればする程善くして下さり、へだてのやまぬ者に一層不憫をかけて下さりおたすけ頂けるとは、五分五分を離れた絶対の真実心を聞かされたのである。唯円房はただあきれるばかりである。

聖人は更に嚙んで含めるように、喜べない原因は愛欲と名利の煩悩に障えられるためであるが、彌陀仏はこの煩悩具足の身をお見抜き下さって、そのどうしてみようもないのが可哀想で、たすけ遂げずばおくまいとお誓い下さった御本願であるから、大慈大悲の誓願はこうした私共のためいことですが、僧侶の生活にはあなた方の想いも及ばない堕落が着きまつわっている、私の申す念仏もあなたの想われるような浄い喜ばしいものではなくて、砂を嚙むというか、蠟を嚙むというか、あさましい念仏しか申されません」と。

白井先生は驚いて老師のお顔を仰ぎながら御自身の耳を疑い、言葉も出ないでいられると、忽ち老師のお言葉が響いて「けれども南無阿彌陀仏はありがたい御言葉ですな」と続いた。「ああそうですか」と先生は覚えず稽首して仰言り、先生の胸からもやもやした塊が抜け去って清風が吹きこんできたようになられたのである。

思うに、よき師にあい、その仰せを聞くと自然に心のしこりがとけて、佛心にみたされるのである。「賢に会えば自ずと寛なり」と古語にもある。人生の旅路に行きなずんでいる時、有縁のよき人に会い、仏心を伝えられると自然に広々としたやわらかな心がひらけてくるように、信の旅においても、名師にあって、仏心のままを聞かされる時、心中の氷がとかされて、功徳の水と転ずるのである。

○

又、近角常観先生の歎異抄講義の中に次のようなことが述べられている。

「私もこの章の御教化の偉大なことに初めは気付かなんであったと知らされて、いよいよ頼もしく仰がれるではないかとの仰せである。

○

これと同じ御体験を白井成允先生の聞法録に述べていられるのでその一節を引用させて頂く。それは昭和十三年の夏、白井先生が足利浄円和上に誘われて、叡山での臼杵祖山老師の大無量寿経の会座にあわれてのち、任地の京城に帰られたのであるが、どうしたことか寂しい気に囚われてしまわれた。朝夕仏前に勤行されても、聖教をひもとかれてもその寂しさがどうにもならず、念仏をしきりに申されても喜びも、雄々しい気も湧かぬようになられた。そこで今まで得たと思いこみ、他にも話された信心に何か間違いが潜んではいないだろうかと、とてもじっとして居られなくなって、海を渡って九州の中津に臼杵老師をたずねられて、早速に、

「お念仏申しても叡山の時のような喜びも湧かず、浄い心にもなれず、私には砂を嚙むようなお念仏しか申されません。今まで頂いていた信心に何か間違いがあるのでしょか」と老師にお尋ねになると、暫らく黙って聞いておられたが、やがて静かに申されるに「あなた方から私共僧侶の生活をご覧になると何か浄い尊いもののように感ぜられるかも知れませんが、決してそんなものではなく、恥ずかし

だ。或時一人の求道者が〃私は如来を疑うてはいないが、喜ぶ心が起こらない〃と云って非常に熱心に求めて来たので私は自分の経験をしきりに話して如来の大悲を喜ばねばならぬことを述べた。然し其人が喜ばしいと云わないので、翌日の再会を期して別れた、翌日約束の時間に急いで帰って見ると、其人はすでに待ち受けていた、そこで前日のように喜ぶべきことを語ったが、益々自分の心を責めて苦しむばかりであった、その容貌もただならぬに気づき、前夜安眠されたかと聞くと、否とのことであった。そこでフト我身を振りかえってみると自分は安眠したばかりでなく、今朝からさほど佛恩を喜んでいなかった。この人に過去の記憶を呼び起して歓びを語ったが、其人に大悲のとどかないのも当然の事であると、一念慚愧の思いが起り、何とも云えぬ孤独寂寥の感に打たれた、其瞬間に念頭にうかんだのが〃親鸞もこの不審ありつるに唯円房同じ心にてありけり〃というお声であった、孤独の身に聖人が忽ち床を同じくされて同情を注がれる様に感じた。そこで即刻その実際と実感を述べ、自分も決して貴方が仰言るように常に喜んでいるのではないが、この喜ばぬ者を益々憐みたまう大悲であると、この聖人のお言葉を取次ぎしたら大いに安心して帰られたことがある、その時はじめて〃唯円房同じ心にてありけり〃の偉大であって一点私ないことが分った」

とある。これは信前の人がこの摂取のこころに引き入れられた例である。要は信前、信後を問わず、この摂取不捨のお心におさめられるのである。

○

近角常音先生はこの章を一応讃仰されたあと、「唯円房は、よろこぶべきことなのにいい加減なよろこびしか出来ませぬと訴えているが、自分は悲しむべきこともかなしめない、だから、悲しむべきこともかなしめぬにていよいよ往生に間違いないとのお知らせをうけている」と仰言って、しずかに念仏されていたのを思い合わせる、

唯円房が表に立って表白されたとすれば、常音先生は裏に立っての述懐であった。憶うに聖人は、よろこべぬにつけても、かなしめぬにつけても、そのどちらの中にも同坐して下さって、無碍の仏光を渇仰して下さるのである、

○

ここで、私共に同坐して下さる聖人、煩悩のうごめく一切の時、一切の所にそのお姿をあらわして下さる聖人のお心に着眼しよう。

私は四年間、問題の生徒の相談にのって県の教護連盟の仕事をしていたが、少年の罪を自分の責任として受けとるのは生みの親だけであった。そこで、私共の問題をわが問題として下さる聖人の上に人類の親としての徳光をあたらしく知らされてきたのである。

しかし人間の親は、子と一緒になっても、悲しいことには力に限りがあって、大きな問題となると、共に溺れるばかりで、そこまで行くと遂には手がしびれてバラバラになってしまうのである。

これは或医師の告白であるが「病気がすすんで手の施しようのない患者の診療はとてもつらくて逃げ出したくなる」と。これも人としてもっともの話であるが、この行き詰るより外ない私共をよく洞察して下さって、無限の慈愛をそそいで下さる方があれば、不完全な人間が下完全なまま、慚愧しながらも、自分に出来るだけのことを続けさせて頂ける道がひらかれてくるのである。

聖人を人類の親としてその徳光を仰ぐのも、愚禿の御身を懺悔されながら、仏心のまことに支えられて、どんな悪にもさまたげられず、障りがあるまんま障りが障りとならぬ無碍の一道を歩まれる、そこに、障り多い私共と同坐して下さり、自然に解決の道をひらいて下さるのである。

私共が行き詰って難渋している時に、知人に訴えても「僕はそんな馬鹿なことをしたことはないよ」と云って、私共の欠点をたしなめられることがあるが、そうした時は、「いや仰言る通りです」とあやまって、退くばかりであるが、若しも私共と同じ失敗をして、それを越えしている人にあうと、自然に私の心もゆたかになり、そこを越える道が見出されて来る。

「さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべし」と仰言る聖人の御目には、地上の人間の織りなす一切の罪業を見られて、そこに聖人御自身も、同じ業縁にあえば同じことをやらかす人間だよと、一切の罪業を御胸一つにおさめて下さって、「さればそくばくの業をもちける身にてありけると、木に火がついたように、罪業とはなれぬ大悲大願を謝していられる。こうした聖人の信の世界には、老少善悪のへだてなく、智愚貴賤の区別もなく、一切の衆生がすっかりおさまっている、浄土の空は宝珠で飾られた網で覆われていて、その網の結び目に宝珠がさがっている。近寄ってその宝珠を見ると、その中に一切の宝珠が残らず映っているということであるが、私はその宝珠を聖人の上に拝するのである。それは聖人であって聖人ならぬ仏光の照り返しである、そこに法然上人の仰せの中に大勢至菩薩の智光を聖人が拝まれたように、私共は聖人の上に仏心の顕現を仰ぐのである、

未　完

慈光　第二十八巻　第八号　昭和五十一年八月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可

あとがき

八月は近角常音先生と白井成允先生の忌月とて、両先生の法語を頂きました。福島先生もすでに浄土にお還りになり、御遺稿をとおしてお育てを頂くばかりであります。

八月はまた原爆の日、敗戦の日であります。衣食住を求めて右往左往し、日本人が歌も笑いも失っていた頃のことが強い太陽の下で思い浮かびます。その後。資源のない島国として、資源を世界に求め、製品を各国に送り出すことに専念して、ドイツと同じように先進国の仲間に経済的にはなりましたが、日本中心の民族的エゴが禍いして、いやが応でも世界的日本人が要求されてきました。かと云って徒らに世界を駆け巡っても狭い心が開かれるとは思われません。唯ここに、古今を貫ぬき、万人がうなずける絶対真実な教えを身につけさせて頂くことが緊急事でありましょう。千三百年昔、聖徳太子が「四生の衆帰、万国の極宗、いずれの世、いずれの人かこの法を貴ばさらん。人はなはだ悪しき者すくなし、よく教うればしたがう。」とも、又「経というは常なり、常というは前聖後賢その是非を改むべからず」とも釈されて、大法を高く掲げて下さり、しかも「それ三宝によりまつらずば何をもってか、まがれるを直うせん」と、共に是れ凡夫。と自照される太子御自身のまがれる身も、佛心のおまことと一つに引きもどされ、まもられてはじめて身を直うさせていただくことが出来るぞと御自身の上に実証されての上で、大法をお勧め下さったことを改めて深く心に銘記させられますことであります。

急告

七月十四日に、「法信」のプリントと、葉書を山口市仁保の松村繁雄さんから頂いて、何の気なしに見ると、御自身の死亡通知であった。そこには死亡月日と時間が書き入れればよいように印刷され、宛名も自筆で用意してあった。

お元気で念佛の友を恋い慕って居られたのに、突然の死であった。ここに謹しんでお別れを惜しみ、浄土の導きを仰ぐばかりであります。

南無阿弥陀仏。

〈御案内〉

○ 毎月第一、二、三日曜、午後一時半、一道会例会。
市バス、新郊通り一丁目下車。
東入る三筋目左入る。
地下鉄、新瑞橋下車。
近鉄呼続下車
又は本笠寺下車、市バス乗りつぎ。

○ 毎月二十四日、午前午後。
昭和区小桜町、教西寺法話会。
市バス、御器所通り下車、又は北山下車

○ 八月は例年通りすべて休講。

定価　半年　七〇〇円（送共）
一年　一四〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区瓢上町二ノ八八　花田正夫　電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区瓢上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七